



コミュニケーションを通じて、仲間とともに世界を広げる

英語科

山口 修司 ・ 柏 敬太

I はじめに

これから生徒たちが直面する社会は、急速な情報化やグローバル化が一層進展し、今以上に将来の変化を予測することが困難になるといわれている。このような多様化する社会において、国際共通語としての英語の役割は一層高まっている。昨年、文部科学省¹⁾が公表した『論点整理』においても、次期学習指導要領における小学校中学年から外国語活動、高学年での教科化が、具体的な方向性として示されている。また、高等学校では、発表、討論・議論、交渉などの高度な言語活動が行われる。このような小学校から高等学校への橋渡しとして、中学校における英語教育が担う役割は極めて重要である。特に、互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を行うことが、今後一層求められる。

今次研究で求める生徒は、このような変化の激しい社会においても、一人一人が考えをもち、様々な文化的背景をもつ他者とともに新たな知を創り築き上げることができる生徒である。今次研究では、英語科における「自律」と「共栄」に向かう学び、「学び舎」の創造における英語科の学びの在り方を研究・実践し、その両輪によって、求める生徒である「自己を拓き、協創する生徒」を目指していく。

II 教科研究内容

1 英語科における「自律」と「共栄」に向かう学び

英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びでは、自分がどのような表現内容について伝えることができないのかを捉え、文法事項・音声・言語機能などの言語面、あるいは内容面から学びの見通しをもつ必要がある。その上で、目的の達成のために必要と考える他者、学習形態、ICT機器、思考ツールといった資源を学級で共有し、生徒個々が選択する。あるいは、学びをどのように推し進めていくのかを言語面・内容面から計画する。そうして学んでいく中で、自分が伝えられるようになった表現を自他との関わりから捉えることにより、自ら学ぶ意欲を生み出すことができる。このような「自律」に向かう視点を切り口とした手立てが挙げられる。

また、「共栄」に向かう視点として、英語で伝える内容について、多様な立場や側面から表現内容を考え、互いに高め合う手立てが必要となる。あるいは、生徒個々で異なる英語表現について、考えた内容を可視化したり、比較したりしながら、表現の広がりや深まりを見いだすなど、互いの成長を支え合うことを目的とした手立てが必要である。そうした学びによって、「できなかったことができるようになった」と、英語でのコミュニケーションに達成感や喜びを感じ、「英語をもっと学びたい」と自ら学ぶ意欲を生み出すことができる。

このような学びの先には、コミュニケーション能力を育んだり、文化的背景の異なる他者と分かり合ったりするために、自ら他者や対象に働きかけ、共に知を創り築き上げる姿が期待される。また、理想の姿のために自らを更新していく生徒を育むことができる。これらのような生徒を育むことを目指し、1年次研究では、英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びについて、研究と実践を進めてきた。

2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びにおいて、学びの見通しをもつためには、スピーチや書く活動、タスク活動などのアウトプット活動を行い、言語面・内容面での自己の課題や目標を明らかにすることが必要である。できることとできないことを区別したり、できない理由を認識したりして、学びの見通しをもちながら、資源を選択したり解決の方法を計画したりすることができる。これらを踏まえ、次の手立てを講じることで、「自律」に向かう視点となる。

- (1) 「自律」に向かう視点の手立て
- ① 学ぶ資源の選択とモニタリング
 - ② 効果的な文構成の計画とモニタリング
 - ③ 単元・題材を通した解決の方法の計画とモニタリング

今次研究において、英語科におけるモニタリングとは、資源の選択や解決の方法の計画といった学習方略に対する自己モニタリングと、学んだ表現に対する相互モニタリングの二つを指すこととする。

学習方略に対する自己モニタリングは、自分が選択した資源や、考えた解決の方法が適切だったのかを、学んだ内容と照らし合わせて確かめるメタ認知的活動である。これにより生徒は、選択した資源や解決の方法に対する評価、原因の分析を行い、次の学びへと自らを促すこととなる。

学んだ表現に対する相互モニタリングについては、その前提として次の点を押さえておく必要がある。中学校段階の英語学習において、考えた英語表現の適切さ・正確さを検証するためには、他者からのフィードバックが重要である。なぜなら、それにより自己の表現を改善する経験を重ねることで、最終的には自分一人で自己の英語表現を修正することができるようになるからだ。自他との関わりの中で考えた表現について、相互モニタリングを行うことで、伝わったことや、十分に伝わらなかったことが明らかとなり、自らの英語表現を高めようとする意欲が育まれる。同時に、仲間とともに考えた表現について、他者から肯定的なモニタリングを受けることで、授業の中で獲得できた知を自覚し、学ぶ意欲を喚起することとなる。



【相互モニタリングをペアで行う姿】

① 学ぶ資源の選択とモニタリング

英語科における資源の選択は、生徒が一つの資源のみを選択することを意味するものではない。なぜなら、英語の授業は、言語技能・言語機能・言語構造などの複数の学習シラバスが混ざり合っており、複数の側面からのアプローチが必要になるからだ。個人の目標を基に、解決に必要なと考えられる資源の選択肢を生徒の声から束ねる。例えば、紹介する内容を広げたい場合は、イメージマップなどの思考ツールを活用しながら仲間と表現内容を考える。文構造や言い換えを考える際は、仲間との話し合いや教師、ALTに英語での質問を行う。また、音声に関する課題をもつ生徒は、仲間や教師に援助を求めたり、タブレット端末での英語による音声チェック機能を使用したりする。このように、目的の達成のために必要となる他者、学習形態、ICT機器、思考ツールなどの資源を、共有した選択肢から選ぶこととなる。また、学んでいく過程では、場面や状況に適した文法事項を適宜選択することとなる。その上で、授業の終末において、学習方略に対する自己モニタリングを行い、自分が選択した資源が適切だったのかを振り返ることで、学び方に対する効力感を高める。また、学んだ表現に対する相互モニタリングを行うことで、他者から肯定的なコメントをもらうとともに、自分の表現の質の高まりを実感し、学ぶ意欲を生み出すこととなる。

<コメント>	
	(イメージマップ ・ ペン図)
	辞書 ○
	Siri
	教師に英語で質問
	過去のワークシート ○
<特に効果が高かったものとその理由> ④ ワークシート : 表現技法など、活かせるのが良かった	

【相互モニタリングでのペアからのコメント (左) と自己モニタリング (右)】

② 効果的な文構成の計画とモニタリング

英語を使って合意形成を図る題材やまとまりのある内容について表現を考える題材など、個々の事実を伝えるだけでは、自己の思いや考えが相手に十分に伝わらない場合がある。こういった状況では、相手に伝わりやすい文構成を計画した上で表現内容を考えていくことが重要となる。生徒は、どのような順序で相手に伝えていくのかを考える。スピーチやプレゼンテーションなどの表現を行う場合であれば、opening, body, endingといった文構成で伝える内容を計画することが挙げられる。また、状況描写などを行う場合であれば、場面や風景などの広い視点で描写を行ってから、個々の人物の特徴や問題点などの細かな点について描写することが効果的である。あるいは、個々がもつ情報を内容ごとに整理することが考えられる。そうして自ら立てた計画に基づいて学んだ後で、伝わりやすい表現となったか、どのような表現が伝わりやすいものなのかを相互モニタリングで明らかにする。また、学び方は適切だったのかを自己モニタリングによって明らかにする。こうすることにより、獲得した知を自覚し、次の学ぶ意欲を生み出すこととなる。

<伝える順序>
 買いたいものや行きたい場所だけ伝える
 行けない旨
 自分が知っているお店の情報(売っている物と定休日)

<振り返り(上の計画を踏まえた振り返り)>
 本当に必要なことだけを伝えることで、相手も自分も整理しやすくなったと思います。また、お店の情報を一番最初に伝えれば、聞きながら考えられたかなと思いました。まとめたことを伝えるときは「They can go Shopping on _____」やお店の情報は「We can buy there, など、canが使えるので次回も使っていきたいです。」

【文構成の計画と振り返り】

③ 単元・題材を通した解決の方法の計画とモニタリング

単元や題材における学習課題を解決するために必要な学習内容やそれらを学ぶ順番を、理由を基に生徒たちが計画する機会を設け、その達成状況をモニタリングする学習展開を手立てとして講じる。例えば、「歴史上の人物をALTに紹介しよう」という単元において、生徒が歴史上の人物について即興的に紹介する場を設ける。その中で話すことのできなかった表現を学級で共有し、必要な学習内容を生徒の発言から束ねる。その上で、学級で学びを進めていく上でどのような内容をどのような順番で学んでいくべきか、理由を明確にして決定する場を設ける。生徒たちは単元の課題を達成するために、例えば文法事項、語および連語、音声といった順で学ぶことを決定する。



OMV Goal-単元を通して目指す自分の姿-

日本の語句を相手(外国人)にわかりやすいように変えて、本来的な原形を見ずに相手に伝える。

<p>伝えたいこと</p> <p>●藤原道長 1. 自らの娘を天皇の妻にした。 2. 摂政としての政治の実権を握った。</p>	<p>●織田信長 1. 安土城を築いた。 2. 「新編素戔」を完成させた。 3. 本能寺で死んだ。</p>
---	--

<Expression you learned>

① Fujinara no Michinaga played an active part in Heianjidan. (藤原道長は平安時代に活躍した。) 222 years ago.

② He thyed Sekkan politics. (彼は摂関政治を行った。)

③ I'll imforotduce about Sekkan Seiji. (摂関政治について説明します。)

④ His daughter got married to the

<Expression you couldn't tell>

【課題】

・発音(過去形の発音、お相手、新出語句、強調、間つかり)

・説明

- ・何を
- ・いつ
- ・誰が
- ・どこで
- ・どのように
- ・誰のもの

【解決の方法の計画と、次時への課題を記入した単元シート】

表現にどのような広がりや深まりがあったのかを相互モニタリングで明らかにする。それによって、生徒は単元の最初に考えた学習内容のうち、どのような表現が身に付いたのか、どのような表現を今後身に付ける必要があるのか、焦点を当てて改善する必要があるのはどのような内容か、などを明らかにする。このようにして、生徒は自らの状況を適切に捉え、次の学びへの見通しと学ぶ意欲を生み出すことができる。

(2) 「共栄」に向かう視点の手立て

- ① 多面的・多角的な思考を促す学習形態の工夫
- ② 多様な表現内容の可視化・共有化

① 多面的・多角的な思考を促す学習形態の工夫

複数の側面や立場から表現内容を考えることが必要な題材において、生徒がその必要性を自覚した上で、使うべき表現を多面的・多角的に考えられるような学習形態を手立てとして講じることで、生徒が共に高め合う学びとなる。例えば、ネイティブスピーカーや初めて交流する英語学習者へ伝達する場を設定した題材では、生徒は場面や相手に応じた適切な表現を考える必要がある。それぞれのグループが考えた文章を共通の文法事項で分類し、意味の違いを明確にするなどして文章の適切さを考える必要性を生徒自身が自覚するよう手立てを講じた上で、センド・ア・プロブレムやワールド・カフェなどの学習形態を講じる。このような学習形態を目的に合った形で取り入れることで、それぞれのグループで考えた表現の質を高め合うことができる。

また、学級の仲間など、なじみのある英語学習者への伝達を想定した題材では、賛成・反対・ジャッジに分かれて行うディベート形式での学習形態などが手立てとして挙げられる。「説得力のある意見を言えていたか」など、ジャッジによる評価の基準を明確にしてディベートを行うことで、様々な立場から表現を考え、自分たちの立場の意見を質の高いものとすることができ、互いに高め合う学びとなる。



【立場で分かれたディベート形式の学習形態】

これらのように共に活かし合い、互いの成長を支え合うことを目的とした学習形態を手立てとして講じることで、生徒は多面的・多角的な視点から表現内容を考え、知を獲得することができる。

② 多様な表現内容の可視化・共有化

表現できる内容が多岐にわたる学習内容において、個々が考えた内容を可視化し、学級全体で共有する手立てを講じる。例えば、日本におけるジェスチャーの意味を紹介する題材において、ワード=ウェブの手法を用いて生徒の表現内容の可視化・共有化を行う。自分が英語で伝えられそうな内容を選び、説明文をシートに記入する。そして個人やグループで考えた内容を、黒板で可視化・共有化する。これにより、「仲間のこの表現は、自分は思いつかなかった」と自他の表現を比較したり、「共通している表現がある」と共通点を見いだしたり、「いくつかの種類に分けることができる」と分類したりする。このような手立てを講じることで、生徒は互いに高め合うことができる。

ワード=ウェブ
…概念マップをグループや学級で行う技法のこと。

【考えた内容を言語機能で分類】

Its meaning is "Sorry." or "Please."
We use it when we ask something.

Ⅲ 実践例

第2学年

Let's enjoy debates!

英語科
実践例

題材のねらい

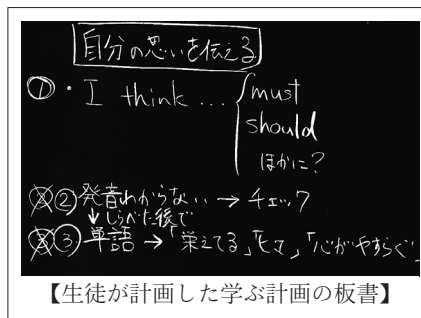
- テーマに関する自分の意見について、理由を加えながら分かりやすく伝えることができる。(本時)
- テーマに関して、相手の意見を踏まえて問答することができる。

授業の実際

- 単元・題材を通した解決の方法の計画とモニタリング<「自律」に向かう視点の手立て>
- 多面的・多角的な思考を促す学習形態の工夫<「共栄」に向かう視点の手立て>

第1時において、生徒はALTの苦手とする日本の食材について、美味しい調理方法をプレゼンする学習活動を行った。しかし、We can～.やIt is～.などの単純な説明では自分の考えを十分に伝えることはできなかった。この課題を解決するために必要な学習内容を学級全体で話し合い、生徒たちは「相手を説得するための表現を詳しく学びたい」「テーマに関する語彙や発音を知りたい」と文法事項、語および連語、音声の順番で学ぶことを計画した。

第2時である本時では、生徒が立てた前時の課題を踏まえ、説得力のある表現かどうかを判断するためには、評価者の存在が必要であることを共有し、説得する表現についてディベートを通して学ぶこととした。テーマを“Which do you want to live in, a city or a countryside?”とし、最初にペアで即興的な意見交換を行った。そして自己の課題を明らかにした上で、ジャッジ



を説得させるためにはどのような意見を言う必要があるのかを考えた。その後、都市派・田舎派・ジャッジに分かれ、ディベート形式で討論を行った。ジャッジによる評価の基準を「説得力のある主張だったか」「英語の表現は正確だったか」などと明確にし、ジャッジからコメントをもらう場を設けた。説得力のあった意見ではどのような表現が用いられていたのかを共有すると、強く訴えたい場合はmustやshould、理由を基に意見を述べる場合はbecause、立場を明らかにして議論を始める場合はI agree with you.などが用いられていた。こうして、複数の立場から得た視点を踏まえて表現を再度考えることで、自己の英語表現を高めることができた。授業の終末では、全体で共有した表現を生かして、授業の導入で意見交換をしたペアとモニタリングを行った。他者からの肯定的なコメントをもらうことで、授業の中で獲得できた知を自覚し、生徒は次の学びへの意欲を生み出した。また、自己モニタリングを行うことで、自分が立てた計画に対する効力感を高めた。

実践を終えて

「共栄」に向かう視点として、立場を分けて考える学習形態を手立てとして講じ、ジャッジの評価基準を明確にすることで、生徒たちは、説得するための文法事項に焦点を当てて共に高め合うことができた。課題としては、「自律」に向かう視点として、相互モニタリングを行った際、相手へのコメントが具体性に欠けるものが見られた。モニタリングの際の視点に生徒が気付くよう工夫を加えるなど、手立てを一層効果的なものにする必要があると感じた。

第3学年

What can we do to solve food problem?

英語科
実践例

題材のねらい

- 身近な食料問題とその解決策を考えるを通して、自分たちがすべきことやしなければならないことなど、助動詞の表現を振り返りながらまとまりのある英文を書くことができる。
- 世界や日本において食物がどのように扱われているのかを表現する際に、動作主が明らかでない場合や行為を受ける対象を際立たせる場合などに、適切に受動態を用いて英文を書くことができる。

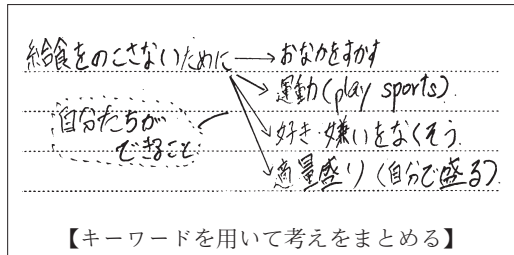
授業の実際

○学ぶ資源の選択とモニタリング<「自律」に向かう視点の手立て>

○多様な表現内容の可視化・共有化<「共栄」に向かう視点の手立て>

教科書で学んだ野菜の歴史について振り返りながら、本校の総合的な学習の時間で取り組んでいる身近な社会問題の解決へと発想をつなげ、食糧問題という大きなテーマについて、その解決方法の一端や自分にもできる小さな行動について考える授業とした。

テーマは、「貧困や飢餓」「食の安全」「食品廃棄や食品ロス」のように内容が多岐にわたる。そこで、生徒個々が表現したい内容を黒板にまとめて共有し、自分たちが実践できそうな解決策として、「食品廃棄や食品ロス」を選び、解決への第一歩として「給食を残さないこと」について伝えることとした。



そこで、個人で英文を書くために必要な方法や道具について全体で共有を図り、課題解決のために和英辞書を用いて表現したい単語を調べることや、ワークシートに要点をまとめていくことで文章構成を整理すること、よりよい表現はないかと仲間と相談したり教師に援助を求めたりするなど、必要に応じて道具や方法を選択しながら、生徒が自分の力で英文を完成することをねらった。

授業の終盤では、それぞれが書いた内容や英文を全体で共有し、黒板で分類した。完成した英文を生徒たちが互いに交流し、仲間から内容の伝わりやすさや表現の広がりに関して肯定的なコメントをし合うこと、自己モニタリングで学び方を振り返ることで、英文の質の向上と自身の成長を感じることをねらった。

実践を終えて

「自律」に向かう視点について、まとまりのある英文を書くという課題の解決のために、個々の生徒が必要に応じて、全体で共有した様々な手段や道具、方法を選択することで既習の語彙や文法を適切に使用し、表現の質を高められたことが成果である。

「共栄」に向かう視点については、表現内容を可視化・共有化する際に、内容面の自由度が高くなりすぎたため、言語面で活用・習得を目指す語彙や表現が焦点化されなかったことが課題である。今後は、内容と言語の両面における自由度を教師が適度に調整し、生徒の声を束ねながら課題を設定することで、

習得すべき言語材料や向上すべき技能をより意識した実践を行うことを目指す。

今回(今回は)日本語で出したキーワードを1つずつ英語にして、使った(使った)ということ...
どんな英語を(か)て構成すればいいか、私に分ら(り)ず(ら)た(ら)し(ま)す。また、
辞書に(お)いて(る)単語、熟語を(と)り(ま)ました 【実践を終えた生徒の振り返り】

IV 実践から見えてきたこと

1年次の実践を振り返り、英語科における「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てについて、以下のことが成果といえる。「自律」に向かう視点としては、英語科における資源の選択、解決の方法の計画としてどのようなものが有効なのかを明らかにすることができた。単に好みによって選択する仲間やテーマではなく、教科の目標に迫る資源の選択や解決の方法の計画が手立てとして有効であることが分かった。また、それらの選択肢や計画を言語面・内容面といった種類に分類することができた。加えて、英語科におけるモニタリングの有効性を検証することができた。これらの結果、生徒は自己の成長を捉えることができ、自己肯定感や自ら学ぶ意欲を高めることができています。

また、「共栄」に向かう視点としては、生徒が共に活かし合い、高め合うために、教材について多面的・多角的に捉えられる学びを展開したり、可視化・共有化して学びを展開したりすることが重要であることが明らかとなった。そのような学びにおいては、選択した資源や計画した解決の方法が有機的に働き、互いに高め合うことができた。

2年次に向けた課題としては、特に「共栄」に向かう視点の手立てを中心に、一層の効果的な手立ての在り方について更に研究と実践を進めるとともに、本校の総合的な学習の時間の柱である「社会参画力」と英語科で育む資質・能力との関連を明確にしたカリキュラムの在り方、あるいは他教科との結び付きを研究・実践していく。特に、言語や文化に対する理解を深めるといった教科目標の要素から、単元や題材配列を含めて研究を進めていきたい。

V 引用・参考文献

<引用文献>

1) 文部科学省 教育課程企画特別部会『論点整理』2015年

<参考文献>

- ・秋田喜代美『学びの心理学』左右社、2012年
- ・江利川春雄『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012年
- ・鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師 「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版、2007年
- ・三宮真智子『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房、2008年
- ・高垣マユミ『授業デザインの最前線Ⅱ』北大路書房、2010年
- ・田村学『授業を磨く』東洋館出版社、2015年
- ・中田賀之『自分で学んでいける生徒を育てる 学習者オートノミーへの挑戦』ひつじ書房、2015年
- ・奈須正裕、江間史明『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』図書文化、2016年
- ・村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年
- ・ラボ教育センター『佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語る ことばの学び、英語の学び』2011年
- ・Dale H. Schunk, Barry J. Zimmerman『自己調整学習と動機づけ』北大路書房、2009年
- ・Edward L. Deci, Richard Flaste『人を伸ばす力ー内発と自律のすすめー』新曜社、1999年
- ・E. F. Barkley, K. P. Cross, & C. H. Major『協同学習の技法 大学教育の手引き』ナカニシヤ出版、2009年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008年